

国立国語研究所学術情報リポジトリ

標準語法の性格

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): standard language, dialect, language of Edo, language of Tokyo, grammar 作成者: 田中, 章夫, TANAKA, Akio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001999

標準語法の性格

田中 章夫

(学習院大学)

キーワード

標準語, 方言, 江戸語, 東京語, 語法

要旨

方言の語法と、いわゆる標準語のそれとを比べてみると、両者の間には、「団塊型／累加型」「多能型／単能型」「微差保有型／微差消滅型」といった対応を認めることができる。方言と標準語の、こうした語法上の差異が、方言は味わいがあるとか含蓄に富むとか評され、標準語は理屈っぽくて、うるおいがないなどとされる一因になっていると考えられる。

しかし、標準語の表現にみられる、上記の語法上の性格は、方言の差異を乗り越えたコミュニケーションに用いられる言語として、標準語が当然備えるべきものでもある。

この論文は、このような、標準語の語法的性格が、江戸語・東京語をベースにして現代の標準日本語がかたちづくられてきたプロセスにおいて、どのように形成されてきたかを考察したものである。

(I)

0. はじめに

標準語は「うるおいがない」とか「冷たい」とか「蒸留水みたいだ」などと、よくいわれる。たしかに、東京方言の「イマッカラ行ッタッタッテ間ニ合イッコネエ」を「今から行ったとしても間に合うわけがない」と言ったのでは、まどろっこしくて気が抜けてしまう。ヤクルト・スワローズの野村監督が継投策の成功した試合後のインタビューで「今日のヒーローはオレチャウンカイ」とやっているが¹、これを「今日のヒーローは、わたしではないのか」としてしまったのでは、彼一流のアイロニーも失われてしまう。また最近のテレビ・ドラマの「ナンバショット」を「なにをしているのか」と標準語にしてしまっては、九州の味わいが消えて、なんともよそよそしい題名になってしまう。

こうした点で、標準語の表現や言い回しには、味わいに乏しくそっけない感じがつきまとうのは否めないところである。

いわゆる標準語の、このようなニュアンスが、なぜ生まれてくるのか、語法の面から考察し、その性格の一端を明らかにしてみたい。

ところで、「標準語」というと、「どんなものを標準語とするのか」とか「標準語と共通語とは、どう違うのか」といった問題がおこってくるが、こんな大問題を論じる余裕はないので、ここで

は、「標準語法」を、つぎのように大ざっぱにとらえて論を進めていくことにする。

標準語（共通語）法：日本人が、人前で話したり、初対面の相手と話したり、あるいは公私の文書を書いたりする時の言葉に用いる語法や表現。

1. 累加型／団塊型

標準語の表現は、単純な要素がつぎつぎと積み重なって複雑な表現内容を表す点に、ひとつの特徴がある。それに対して、方言の表現は、複雑な表現内容をもつ、きわめて少數の要素で表してしまう傾向がある。比喩的にいえば、前者は串ダンゴのように表現要素を足し算していくタイプの表現であり、後者は握りメシやボタモチのような、内容のある一つか二つの要素で満足させてしまう凝縮したタイプのものである。そこで、標準語のタイプの表現を累加型、方言のタイプの表現を団塊型と呼ぶこととする。

1.1. 「～なけれ-ば-なら-ない」

まず、はじめに標準語の「～なければならない」に当たる、各地の方言の語形について見ていくことにしよう。

なお、以下の用例の出典・採録地点・担当者などについては、末尾の「資料略号一覧」を参照されたい。

①アサゲ ハヤグ オキデ ワラ プタンナネケジー。

朝 早く 起きて 薫（を） 打た-なけれ-ば-なら-なかっ-たよ。

（談-1・山形・P19）

②アイナカデ シゴトバー イモホリ ヤーナンカヲ シェンバジヤルケン。

途中で 仕事を 薩掘り やなんかを し-なけれ-ば-なら-ないので。

（談-2・長崎・P354）

いずれも、国立国語研究所の「方言談話資料」から引用した用例であるが、この資料は各地方言の専門家が、方言の談話を採録して文字化し、標準語訳を施したものである。

①の山形のことばでは、標準語の「（薫を）打た-なければならなかっ-た」にあたる個所は「ブタ-ンナネ-ケ」と、たいへん短い形に圧縮されてしまっている。②の長崎のことばでも「し-なければならない」が「シェンバジヤル」と短くまとまっている。

このように標準語で「～ない+ば+なる+ない」と四つの要素を積み重ねて累加的に表現するのに対して、方言の方はいずれも「～ンナネ」「～ンバジヤル」と、ひとまとまりの団塊的な形になっている。

1.2. 「～ない-だろ-う」

現在の標準語では、「雨は降るまい」というように、「～まい」の形で「打消の推量」を表すことはほとんどないが、方言では各地に、つぎの「(ナリヨラ)マイ」のような「～マイ」による「打消の推量」表現が行われている。標準語の「(なってい)ないだろう」にあたるものだが、これは、

いうまでもなく「～ない+だ+う」といった累加的表現であり、「打消」と「推量」とが、はつきり分かれている。それに対して、方言の「～マイ」の方は、こうした区別をせずに、ひとまとまりで表してしまっている。この点で、標準語の方は分析的な表現、方言の方は非分析的な集約的な表現ととらえることもできよう。

エー モー アレワ モー エー モーケ ナリヨラマイヨ。
ええ もう あれは もう いい もうけ (に) なってい-ない-だろ-うよ。

(談-6・愛媛・P 147)

1.3. 「～で-は-ない-か」

標準語の「～ではないか」にあたる形として、東日本各地に「～ジャンカ」という形がある。近年は東京方言でも使われているが、地域によっては、②のように、きわめて圧縮された「～ジャ」の形をとるところもあるようである。また青森には、③のように「(いい) ではないか」を「(エ) ドナテ」ですませてしまうところもあるという。標準語の「～で-は-ない-か」は、はつきりした累加的・分析的な語形だが、方言の方はいずれも、きわめて団塊的・集約的な表現である。

①イッチョンチョントカ ナントカ イッテ ワラッタジャンカ。
いっちょんちょんとか なんとか 言って 笑った-で-は-ない-か。
(談-1・長野・P 309)

②マチノ シュージャナイ イヤマノ シューダッテ イッタッケジャ。
町の 衆じやない 油山の 衆だって 言った-で-は-ない-か。
(談-5・静岡・P 255)

③フトグアリニ ミンナ スネバ エドナテ。
「一回に みんな 死ぬと いい-で-は-ない-か。」といって (談-3・青森・P 125)

1.4. 「～こと-が-できる」

標準語の可能表現の「～ことができる」なども、典型的な累加型の語形といえよう。これに当たる可能の言い方としては西日本に広く、つぎの①②に示すような「～エル」がみられるが、標準語の「～こと+が+できる」に比べると、たいへん集約的な団塊型の表現である。

①オレガ カミサマ グレーワ オガミエル モンダッテ。 ソーイッテ
俺が 神様 ぐらいは 拝む-こと-が-できる ものだってね。 そう言って
(談-3・愛知・P 324)

②マルマゲ ユータ シャシンノ アッタテ ネー。 モー イマ
丸鼈 結った 写真が あったのに ねえ。 もう 今
ミシケダシャエンドーン。
見つけ出す-こと-は-でき-ないけれども。 (談-2・長崎・P 318)

1.5. 「～た-こと-が-ある」

標準語にはまた、経験を表す言い方として「～た+こと+が+ある」の形があり、これに対応する方言形には、つぎの「～タッタ」などがみられる。前者はきわめて分析的な累加型の表現であり、後者は団塊型の圧縮された表現ということができよう。

オレガ イッカイ ノゾッテ ミタッタ。

おれは 一回 視いて 見-た-こと-が-ある。

(談-8・群馬・P38)

1.6. 「～てしまう」

これは東京方言でもよく使われる言い方だが、標準語の「～てしまう」に当たる言い方として、東日本には広く「～チマウ」「～チャウ」の形がある。その過去形は「～チマッタ」「～チャッタ」となるが、千葉方言には、①の末尾にみられるように、「～チッタ」という、きわめて凝縮した形がある。この形は、井上史雄によれば、近年、東京に入って東部から次第に西部に向かって広がりつつある「新方言」の一つだという²。

また各地の方言の専門家が分担執筆した、国立国語研究所の「日本方言の記述的研究」の「鹿児島」の部には、②に示すように「～トッタ」の形について、「東京語の『～てしまう』にあたる」という（注）がついている。

①ホイカラ モグリガ イチマンエン、フネガ イクラカナー キメテ ヤッタッケン
それから 潜りが 一万円 船が いくらかなあ 決めて やったけど
ウミ ハー サーット ミチマッテデテ コンデワ ソンシチャウカラ
海 もう さあっと 見-て-しまっ-ておいて これでは 損し-て-しまうから
ッチュー ワケデ ヤッタダオ。 ウンマイ サクセンニ ノッカッチッター。
という わけで やったのだよ。 うまい 作戦に 乗っ-て-しまったあ。

(談-7・千葉・P109)

②田ノ 草ワ 取イトッタ。(注) 東京の「てしまう」に当たる。 (記・鹿児島・P312)

以上述べてきたような、標準語の分析的な累加型の表現は、論理構成に有利なものではあろうが、集約的に丸ごと表現してしまう、方言の団塊型の言い方に比べて、理屈っぽい冷やかな感じを与えやすい点は否定しえない。しかし、もし外国人が学習するとしたら、集約された複雑な語形を個別に習得していかなくてはならない、方言の団塊型の表現よりは、比較的単純な要素を積み重ねていくだけの、標準語の累加型の表現の方が論理がたどりやすく習得しやすいことはいうまでもなかろう。

2. 単能型／多能型

標準語の表現と方言のそれを比べてみると、方言には、さまざまな表現機能を併せ備えた要素が目につく。それに対して、標準語の表現をになう要素は概して単純で、方言の場合のような、いくつもの表現機能を兼ね備えたものは、すくなくとも現代の標準語にはほとんど見られない。そのために、方言では一つの語形で表しうる表現内容が、標準語では二通り三通りの語形に分化

していくことが珍しくない。これは、標準語の表現は野球の指名打者のような専用的な性格を持ち、方言の方は広くなんでもこなしていく万能選手的な性格をもっているからである。前者のタイプを「単能型の表現」とし、後者のタイプの表現を「多能型の表現」と呼ぶことにする。

2.1. 「～ペイ」の場合

東日本各地には、推量と意志と勧誘とを表す、いわゆる「関東ペイ」が広く分布している。さらに、宮城には④に示すように、様態に当たる用法もあるという（この点は、担当者に確認したが、この標準語訳には自信があるということだった）。そうなると、たとえば宮城方言の場合には、「～ペイ」は、標準語の「～だろう（推量）」「～う・～よう（意志・勧誘）」「～ようだ（様態）」の表現機能を兼ね備えているわけで、たいへん表現内容の豊かな語形である。

①推量（～だろう） ホダナ ゴド ナエペ （そんなことないだろ） （記・山形・P42）

②意志（～う・～よう） オレモ エッショエ エグペ（俺も一緒に行こう） （同上）

③勧誘（～う・～よう） オマエモ エッショエ アエペチャ（お前も一緒に行こうよ）

（同上）

④様態（～ようだ） クルマオス ステテ キテワ ハラ ヘッテス

車押し して 来てね 腹は へっているし（赤ん坊に）

オッパイ ノマレッペス。 ダカラサ ハラ

おっぱいを 飲まれてしまったようだし。 だから 腹は

ヘッテンダゲットモ

へっているんだけれども （談-5・宮城・P163）

2.2. 「～メイ」の場合

現代の標準語では、打消の推量や意志は普通「（雨は降ら）ないだろ」「（二度と行く）のはよそう」などと言ってしまい、助動詞の「～まい」を使うことはあまりないが、各地の方言では①②に示すように、「～メイ」あるいは「～マイ」の形で「打消の推量」と「打消の意志」を表す表現が行われている。これも、方言における多能型の表現の一例といえる。

①打消の推量（～しないだろ） キヨーワ アメワ フラメイ。

②打消の意志（～するのはよそう） マー（もう） ヤラメイ ト オモッタ。

（記・愛知・P137）

2.3. 「～ゴタル」の場合

九州や四国にみられる「～ゴタル」も、標準語の「～のようだ」「～らしい」「～だろう」「～したい」などの表現を広くカバーする点で、多能型の方言語形の一例としてあげられる。

「～ゴタルは、様態をあらわす。また、他に、推量や希望をあらわすこともある」

①様態（～ようだ）・推量（～だろう） アシタハ アメガ フルゴタル

②希望（～したい） ハヨ カエロゴタル （談-6・宮崎・P196）

2.4. 「～ゲナ」の場合

西日本各地には、童謡の「てんてん手鞠、てん手鞠…」（西條八十『鞠と殿様』）の歌に「山のみかんになったげな。赤いみかんになったげな、なったげな。」と出てくる「～ゲナ」がある。これも①に示す標準語の「～のようだ」「～らしい」に当たる様態と、②のような「～するそだ」「～ということだ」に当たる伝聞とを広く表す。

「様態や伝聞を表す助動詞にゲナがある」

- ①様態（～のようだ） グウェー（具合）ガ ワルゲナナ
②伝聞（～そだ） ムカシ オニガ オッタゲナ

（談-6・鳥取・P18）

2.5. 「～エル」の場合

現在の標準語法では「～れる・～られる」は、もっぱら受身の意味で使われ、「自分の名前も書かれない」のような可能の表現に用いることはほとんどない。可能の場合は、普通「～ことができる」の形や可能動詞が使われる。青森のことばでは、つぎの①②のように標準語の「～れる・～られる」に当たる「～エル」は受身・可能の両方を表すだけでなく、「～ニカッテ～エル」の形で、いわゆる「迷惑の受身」を表す用法をも持っている。

ほぼ受身専用の標準語の「～れる・～られる」に比べて、青森の「～エル」は多能的な語形だということができよう。

- ①受身（～れる・～られる） ショーカ[°]ッコ オワレバ タノマエデ サヘトネナー
小学校（を） 終わると 頼まれて さへ取りになあ
ドゴサ エゲーテ。
どこに 行けと （談-3・青森・P38）
クスリヤサ ネガ[°]ネ エゲバ アノ カッチャ
薬屋に 願いに 行くと あの 母さん
ニカッテ* ニラメラエデ ヨー
に にらまれて よう （同上 P51）

*「～ニカッテ」は後に受身の語法を伴うが、たいてい不利な悪い事態の内容がくる。
（同上 P59）

- ②可能（～ができる） 「ミヅ キレバ ドンデ アッタベア」「ワダラエネセア」
(可能動詞) 「水(が)来れば どうで あつたろう」「渡られないよ」
（同上 P62）

2.6. 「～ダ」の場合

標準語の「～た」に当たる山形の「～ダ」は「単純な過去」のほかに、つぎの②のように「動作・状態の継続ないしは完了」を表す用法を持っているという。この用法は他の地域の人に誤解されやすいとして、*印のような担当者の注記がついている。

- ①過去（～た） アサケ[°] イエー エダドギヨー ハヤー^グ オゴサッデ、

朝方 (に) 家に いたときよ 早く 起こされて、

(談-1・山形・P20)

②継続 (～ている) アノ ツンブシェメー リヤ シェック クッドギハー
あの タニシ捕り ほら 節句(が) 近づくと
シェメッダ シト ホツツコツツエ タンボエ エッケ。
捕っている 人(が) あっちこっちに 田圃に いたっけ。

(同上 P118)

*「～タ」を過去のほか完了として、特に現在のことに使う用法が著しい。

(同上 P16)

「マンダ ハシッタ」は「まだ走っている」ことで、「オレモ ミッダ」は「私も見ている」ことである。「た・だ」の変則的な用法であり、誤解を招きやすい。(同上 P30)

こうして比べてみると、標準語表現の語形は、概して意味・用法が狭くて単純であり、方言のそれは意味・用法が広くて複雑だということになる。両者の間の、このような性格の違いが、標準語は味わいがない、方言は含蓄がある、味わいが深いといった評価を生み出す一因とみられる。また、外国人にかぎらず日本人でも他国者には、意味・用法の複雑な方言の言い回しは習得しにくい。「方言は国の手形」といわれるゆえんである。

3. 微差消滅型／微差保有型

しばしば指摘されることであるが、標準語では言い分けるのが困難な微妙な細かい差異を、方言ではきちんと区別して表現している場合がある。たとえば西日本には、

ボートが沈みヨル (今まさに沈みつつある)

ボートが沈んドル (沈んでしまって、そこにある)

といった違いを簡単に表現しうることばが広く分布している。しかし、これに当たる標準語の「ボートが沈んデル」は、この違いを表さずに、どちらの場合にも用いられる。

この点で標準語の表現は「微差消滅型」、方言のそれは「微差保有型」とでも呼ぶことができそうに思われる。

3.1. 継続態 (～しつつある) と結果態 (～してしまっている) の区別

動作・状態の進行ないしは継続の表現と、動作・状態の完了あるいは結果の存続とを区別して表現しうる例として高知のことばをあげておく。①が「継続」の表現であり、「(声を) シヨラー」「(伝えて) 来ヨル」の「～ヨル」は、いずれも標準語の「いま～している」に当たる。②は「結果の存続(完了)」の表現であり、「(聞い) チヨル」「(住みつい) チュー」は「すでに～している」に当たる。

①ソノ タユーサンガ オーオート ユーテ オーカミノ ナク コエオ
その 神宮さんが おうおうと いって 狼の 鳴く 声を
シヨラーよ。

しているよ（出しているよ）。

（談-2・高知・P156）

ソノ ユワレオ ズーット トウタエテ キヨル トコロ。

その いわれを ずうっと 伝えて 来ている ところ。 (同上)

②コンドモノ オリカラ オヤンヂラーン デンマラーニ ハナショ キーチョルンガノー こどもの 折から おやじなんか 祖父なんかに 話を 聞いているがねえ

(同上 P134)

モウ スミトウイチュート ナンチャー キンガ トウカン。

もう 住みついていると 何も 気が つかない。 (同上 P143)

これについては、かつて柴田武が、その著「日本の方言」（岩波新書）において高知市方言の「読ミユウ（いま読みつつある）」と「読ンデュウ（すでに読んでいる）」を例にしてくわしく論じている³。

3.2. 一般動詞の自然態（～れる・～られる）／完了態（～た）

標準語の「自発（自然可能）」の表現は「思われる・思い出される・考えられる・感じられる」など動詞がきわめて限られている。ところが、山形のことばでは「自然にそうなった」という時の「完了」を表わす「～ラタ（～ラテ）」が一般的の動詞に広く用いられ、これは普通の「完了」を表す「～タ（～テ）」とは区別されるという。たとえば、①にあげた「（起き）ラタ」は「自然に目覚めた」の意味であり、「（起き）タ」は普通の「過去・完了」を表すというわけである。②に出てくる「（背負っ）タ」は普通の「過去・完了」、「（引っ張）ラテ」は「自然態の表現」である。

①自然にそうなったことをあらわすには「ラテ・ラタ」を使う

「朝 5時に 起ぎラタ（自然に起きる結果になった）」 (談-1・山形・P16)

②マロガネデ ショッタツー。 グルヅル シッパラテ コンド
(稻を) 束ねないで 背負ったなー。 ずるずる 引っ張る状態になって こんど
アンコ。 ツランナグナテ。

足（を） 運べなくなって (同上 P91)

3.3. 能力可能（兄は泳ぐことができる）と状況可能（上流は泳ぐことができる）

東京や大阪のことばには見られないが、全国に、能力についていう可能の表現と状況についていう可能の表現とを区別して言い表すことができる地域が広く分布している⁴。

①可能表現に、能力的な可能を表す場合と状況的な可能を表す場合との区別がある。

能力可能：ヨーヨム・ヨーヨマン（読むことができる・できない）

ヨーキル・ヨーキン（着ることができる・できない）

状況可能：ヨメル・ヨメン（読むことができる・できない）

キレル・キレン（着ることができる・できない） (談-6・鳥取・P17)

②能力可能（エ読マン）と状況可能（読マレン）の区別がある。 (談-6・宮崎・P164)

接頭辞的な助詞に「エー」がある。これは能力を示すものである。「エーセン」は「できない」、さらに「エー読ミキラン」など「kir-」をつけると「とても読めない」というように

意味が強くなる。

(記・富崎・P 289)

「kir-」は可能である。たとえば「書ききる」は「書くことができる」である。能力についていう。

(同上 P 286)

3.4. 単純否定（～しない）と継続否定（～していない）

標準語では「今日は風呂にはいらない」も「一週間も風呂にはいらない」も「～ない」一つで表してしまうが、たとえば、つぎにあげる和歌山のことばでは、前者は「(はいら)ン」、後者は「(はいら)ナイ」になるという。①は単純な否定、それに対して②は継続的な事象や未了の状況について用いる「否定」の表現である。

①単純否定：テキヤ コノゴロ ャッテ コンナー。

かれは このごろ やって 来ないね。

ネテルカシテ トット カオ ミセンノー。

寝ているのかして 少しも 顔を 見せないなあ。

②継続否定：アノ ミセデ ミカン ウリナイジー。

あの 店で 蜜柑を 売っていないよ。

アンテキア イマ テガキ カキーナカッタ。

あいつは 今 手紙を 書いていなかった。

「～ナイ」……否定形には相違ないのだが、単純な否定（これは「～ん」である）には用いられない、否定的な継続態を表現するのに用いられるのが特徴的である。

(記・和歌山・P 189)

3.5. 有情（生きもの）と非情（もの）

「犬がいる／車がある」といった「有情／非情」の区別は標準語にももちろんあるが、茨城のことばでは、所有格の格助詞の用法に、この区別が認められるという。

茨城方言には、標準語の所有を示す格助詞「ノ」にあたるものとして「ガ」と「ノ」の2つの助詞がある。そして「ガ」は「生き物」に、「ノ」は「物」について使われ、その間には、かなりきびしい使い分けがある。

有情： オレガ アシ 一郎ガ モノ

非情： ツクエノ アシ オラジ（おれのうち）ノ モノ (宮島 P 533)

方言学の専門家ならば「そんなことを言いたいのなら、もっといい例がたくさんある」といわれることだろうが、標準語にはみられない微妙な区別が、方言の表現に保たれていることは、両者の間の一つの大きな違いである。こうした微妙な区別を保有していることは、方言の表現に深みのある情感をたたえる要因といえよう。しかし、これを他国者が習得することは至難の業である。標準語においては、このような語法上の微妙な差異が消滅してしまっているのは、当然といえば当然の話である。

これまで3節にわたって、標準語と方言の語法上の性格の違いを述べてきたが、ここでまとめてみると、標準語は、意味・用法の単純な語形の積み重ねでストレートに表現する傾向があるのに対して、方言の方は、意味・用法の複雑な語形で微妙なニュアンスの違いまで表現しようとする特徴がある。両者の間の、このような性格の違いが、標準語は理屈っぽくて冷たい、うるおいがないといった評価を生み出し、一方、方言は情緒がある、味わいが深いとされる、大きな要因とみられる。

しかし、標準語の、このような語法上の性格は、標準語である以上は、当然そなえるべきものであり、標準化のプロセスで次第に形成されてきたものと考えられる。そこで標準語の形成過程で、以上述べたような標準語の語法が、どのようにしてかたちづくられてきたか、考察してみたい。

(II)

4. 累加的表現の発達

ごく大ざっぱにいえば、16世紀末から17世紀にかけて、関東方言圏の江戸の地に、織田・豊臣の昔から上方との交流が頻繁だった三河・駿河など東海地方から徳川の家臣団とその家族が移り住み、さらに上方の商家も進出してきて、関東のことばを母胎としながらも上方のことばの強い影響を受けつつ、「江戸ことば」が形成された。くだって、幕末から明治の初期には、薩摩・長州をはじめ全国各地の人々が東京に集まってきて、江戸ことばをベースにして東京語が作られ、それを土台にして標準語がかたちづくられてきた。

その過程で、これまで述べてきた「累加型」「単能型」「微差消滅型」といった「標準語法の性格」がどのようにして出来あがってきたか、まず、累加型の表現の場合から見ていくことにする。

4.1. 「～ナンダ」から「～なかっ-た」へ

大正のはじめに流行した「金色夜叉」の歌（宮島郁芳・1918-大正7）に「僕が学校おはるまで、なぜに宮さん待たなんだ」というのがあるが、少なくとも明治の中ごろまでは、東京のことばでも、「(待た) ナンダ」が使われていた。大正期には、すでに「～ナンダ」は衰えてしまっているが、この歌の場合は明治を回想したものであろう。

中村通夫によれば、「～なかっ-た」は幕末の18世紀中葉、天保期ごろから、使われはじめ、明治になってから一般化したものという⁵。したがって、このころの東京語で、団塊型の「～ナンダ」から累加型の「～なかっ-た」への移行が行われたわけである。幕末に刊行された、S. R. ブラウンの「日本語会話」が、②に示すように「～ナンダ」と「～なかっ-た」の両方をあげている点は、この間の事情を物語るものである。ちなみに、仮名垣魯文の「安愚樂鍋(1871-明治4)」では、「～ナンダ」は「覆古（ふくこ）の方今話（いまやうばなし）」に登場する「いづれの旧藩かの公用方とおぼしき男」のことばに1例見られるのみで、残り4例はすべて「～なかっ-た」になっている。

なかには、③にあげた饗庭篁村のように、かなり遅くまで「～ナンダ」にこだわった作家もいるが、大勢としては「～ナンダ」は、江戸語の語形といってよい。

①米「今朝は一度もおまへに合はなかつたねへ」 かつ「アヽわちきもさう思つてゐたヨ」

米「おまへの来るのをまつてゐたから、まだ（三味線を）鳴らさなんだヨ」

（「春色恵の花」二編・巻之下・1836-天保7）

②オマイニ ワカレテヨリ ヒサシク アハナンダ。（P84）

ナゼ ハヤク コナカッタカ。（P167）（S. R. ブラウン「日本語会話」1863-文久6）

③ホンニ気が付かなんだ、夫（それ）は私（わたし）が持ちませう。

（饗庭篁村「人の尊」1886-明治19）

④Kyoto made ichi do mo yukanakatta.

So wa iwananda. （J. C. ヘボン「和英語林集成」1版・1867-慶応3）

4.2. 「～マシナンダ」から「～ませ-ん-でし-た」へ

打消の過去形は、江戸ことばには「(行き) マシナンダ」と「(行き) マセナンダ」の二つの形があった。これについて、湯沢幸吉郎は、その著「江戸言葉の研究」の中で、つぎのように述べている。

「なんだ」は「ます」にもついてその未然形について「ませなんだ」となる。しかるに、これを「ましなんだ」とした例が多く、江戸ではむしろそれが普通であったようである。

（P488-9）

これらの形は明治初期の東京語にも、受け継がれているが、どちらかというと「～マセナンダ」の方が優勢である。

また、この時期の東京語には、すでに「～ませ-ん-でし-た」の形も見られるが、②にあげた「～ませ-ん-だっ-た」や③の「～ませ-ん-かつ-た」なども用いられていた⁶。これらの形はいずれも、「丁寧」と「打消」と「過去」がはつきり分離した、累加型の表現であり、ここにも、江戸語的な団塊型の「～マシナンダ／～マセナンダ」から累加型の表現への移行が見られる。明治初期に行われていた、これらの語形は、やがて標準語形としては「～ませ-ん-でし-た」に収斂していくわけであるが、「～ませ-ん-でし-た」の成立はかなり早く、松村明・小島俊夫によると、幕末の人情本に登場する町人男女が使い始め、明治になって一般化したものという。④は、その初期のころの用例である。

①私が何ともその挨拶が口へ出ましなんだ。 （「花籠」1841-天保12）

ワタクシハ キキマシタケレドモ ワカリマセナンダ。 （「日本語会話」 P55）

②Chitto mo shirimasen' d'atta. （E. サトウ「会話篇」Part I. X-23・1873-明治6）

③へえ薩張（さつぱり）心付きませんかったが、店の者が女部屋へ這入つては悪うござりますか。 （三遊亭圓朝「怪談牡丹燈籠」第一回・1865-元治1/筆記・1884-明治17）

④ホンノ謔戯（じやうだん）にお糸さんが、揶揄（からかふ）のだと思って、実正（ほんたう）にも聞きませんでしたが、 （「花暦封じ文」三編-中・1866-慶応2）

4.3. 「～こと-が-できる」の成立

可能動詞や「レル・ラレル」に対して、累加型の「～こと-が-できる」が使われはじめたのは、19世紀初頭の化政期の江戸語においてであるが⁷、それ以前に、もっぱら「不可能」の表現に用いられる「～こと-が-なる」の形がある。①の例がそれである。したがって可能表現の場合は、かなり早くから累加型への移行が進行していたことになる。

①御給金をつかひこまして、夫故引こす事がなりません。

（「鯛の味噌津」野島地蔵・1779-安永8）

②江戸へ金を持て帰（けへ）ることは出来ません。 あれば有限（ありつきり）つかふといふ所さネ。

（「浮世風呂」四編-上・1809-文化6）

③Ei-go wo narawanakatta keredomo yoku hanasu koto ga dekiru.

（J. C. ヘボン「和英語林集成」1版・1867-慶応3）

4.4. 「～ザナルメエ」から「～なけれ-ば-なら-ない-だろう」へ

小原庄助さんの「会津磐梯山」に「行かざあなるまい、エーまた顔見せに」と「～ザナルマイ」の形が出てくるが、この形は①に示すように江戸語以来、明治期の東京語にも用例がある。しかし、幕末から明治初期の東京語には②の「～なけれ-ば-なる-まい」などの語形が現れ、それはやがて、③の「～なけれ-ば-なら-ない-だろう」のような、きわめて分析的な標準語形につながっていく。

①どうしても帰らざアなるめへのウ。

（「梅児誉美」巻一・1832-天保3）

人の娘の体格検査をせざあなるまい。

（「婦系図」前編-20・1907-明治40）

②死骸（しげえ）でも引取って、姪（めえ）とか名を付けて、とひ弔（とむら）ひをしなければ成るめえと、 （三遊亭圓朝「真景累ヶ淵」二十九・1859-安政6／筆記・1888-明治21）

③一所に居る為めには一所に居るに充分なる文個性が合はなければならぬだらう。

（「吾輩は猫である」十一・1905-明治38）

4.5. 「お～だ」「お～です」「お～に-なる」「お～する」の成立

いずれも接頭語の「お～」に敬意をゆだねた敬語形であり、敬語動詞や「～レル・ラレル」による敬語表現に比べると、分析的な累加型の表現といえる。

これらのうち「お～だ」は、つぎの①のように江戸語にも早くからあるが、「お～です」の形は明治の初期に、また、「お～に-なる」「お～する」の形は幕末期に成立し、明治の中ごろから一般化して標準語に引き継がれたものである⁸。

①(みなみな笑ふ)「何をお笑ひだ」

（「浮世床」初編-巻之下・1813-文化10）

「何時返事をお出しただ。」

（「浮雲」第四回・1887-明治20）

Shotai dogu-no ts-kanai hey-a-wo o-konomi desu ka.（「英和通信」I・1872-明治5）

Doko ni osumai desu ?

（W. G. Aston「A Grammar of Japanese Spoken Language」1888-明治21）

②何でも今夜は松さんも、是非お泊（とまり）になりませうから、

（「花筐」二編-中1841-天保12）

貴君（あなた）ハ宇都宮へお出になつて居まして、御父さんのお隠れになる前の日に御帰りになつたでハ御座いませんか」

（「雪中梅」上編-第四回・1886-明治19）

③若旦那から金の始末、委しくお詫びして貰へば、（「明鳥後正夢」初-四・1821-文政4）

「今更真人間に復（かへ）る必要もないのです」「さあ、必要はありますまい、私も必要からお勧めするのではない」

（「金色夜叉」後篇・1900-明治33）

以上、述べたように、現代の標準語法に見られる、累加型の表現は、4.3. の「～こと-が-ならない」や「～こと-が-できる」のように早いものもあるが、大勢としては、幕末から明治初期の東京語においてかたちづくられ、のちの標準語に受け継がれていったことができる。

5. 多能型表現の分化（単能化）

つぎに多能型の表現が分化して、単能型の語形を生み出していく様子を見ていくことにする。

5.1. 意志と推量の分化—推量専用表現の形成

江戸語では「推量」と「意志・勧誘」の表現は①に示すように「～ウ・～ヨウ」の形で、また、その「打消」は、③の「（売る）マイ-意志」「（つく）マイ-推量」「（いふ）マイ-勧誘」のように、「～マイ（～メエ）」で表すのが普通である。いずれも多能型の語形であるが、江戸語にはまた②の「（き）たろう」「（来る）だろう」といった、推量表現専用の単能型の語形も用いられていた。したがって、多能型と単能型とが並び行われていたわけで、この傾向は④⑤の例からもわかるように、幕末から明治の中ごろまで変わらなかったようである。

その後、しだいに「～ウ・～ヨウ」「～マイ」は、「意志・勧誘」の場合に限られるようになり、推量の表現は「～だろう・～ただろう」などの推量専用の形にゆだねられるようになっていった。さらに、「～マイ」は、この形そのものが使われなくなり、「打消の意志」は「～のはよそう・～ないつもりだ」、「打消の勧誘（禁止）」は「～のはよせ・～のはやめろ」といった言い方に移っていった。

①「よしよし晩に早く仕舞て、切（きり）を見に押しかけよう。しかし、御新造さんの時はうまい物が少なからう」

（「浮世床」初編-中・1813-文化10）

「親分も音頭を取て呉ようから、友子（ともこ）友達が手木前（てこめへ）で輿櫓（きやり）をやらかして呉よう物（もん）なら、おらアうかむぜ」

（同上・初編-下）

②歌「いゝエ外の。女郎衆の所へ。きなんしたよ」 長「そんなら。吉らも。きたらふ」

長「来（き）ないじやあるまひ。やつはり来るだらふ」（「南闇雑話」1773-安永21）

③「今度（こんど）は売（うる）まいと云（いつ）ても買（か）う」

（「浮世風呂」前編・卷之下・1813-文化10）

「死んだとおもつたおとみとは、お釈迦（しゃか）さまでも気がつくめえ」

（「輿話情浮名横櫛」四幕・1853-嘉永6）

「新五左（しんござ）、かならずつきな事を云まいぞ」 （「辰巳園」1770-明和7）

③Kono hon no koshaku wo kiitara omoshirokaro.

Kesa hayaku tatta kara mo imagoro Tokyo ye tsuitaro.

Kaze ga fuitaraba hana ga chiru daro.

Asu wa furimasumai. (J. C. ヘボン「和英語林集成」1版・1867-慶応3)

④人は皆我一人を愛して我一人の為めに働いてゐるやうに見えよう。

(二葉亭四迷「浮雲」1887-明治20)

死骸（しげえ）でも引き取つて、姪（めえ）とか名を付けて、とひ弔（とむら）ひをしなければ成るめえと、

(三遊亭圓朝「真景累ヶ淵」二十九・1859-安政6/筆記・1888-明治21)

中村通夫は、明治期に進んだ、このような「意志」と「推量」の分化について、その著「東京語の性格」の中で、つぎのように述べている⁹。

東京語においては「意志形」と「推量形」は同じ「う」「よう」で表現されることなく、おののおの表現分擔を異にしている。大別すると、

意志形（行こ）う 推量形（行く）だろう

の形であらわすことができると思う。 (P 157)

意志形・推量形の分化している今日、この言葉（～マイ）が東京語の選択意識の中から消えつゝあることは、当然のことであろう。

(たぶん行くまい) 行かないだろう

(私は行くまい) 行かないつもりだ

のごとく、下列（右側）の言い方が好んで用いられるのである。 (P 169-170)

5.2. 丁寧体の推量と意志勧誘表現の分化

丁寧体の場合も、江戸語では①に示すように「～マショウ（～ヤショウ）」の形で、「推量」も「意志・勧誘」も表すのが普通だった。しかし、19世紀中ごろの天保期になると、推量専用の形として②にあげた「～ますだろう」が生まれ、やや遅れて幕末には③に示すように「～でしょう」の形も成立する。いずれも、江戸の町人男女の間で使われはじめたものである。「～ますだろう」の方は明治の東京語では衰えてしまうが、「～でしょう」は標準語の、丁寧体推量表現をになって今日にいたっている。

1904年（明治37）から使用された最初の国定教科書「尋常小学読本」には、丁寧体の推量表現として④のように「～マショウ」と「～でしょう」の両方が出てくる。この時期の推量表現の実態を反映したものであるが、このうち「～マショウ」の方は推量の言い方としては次第に用いられなくなり、「～マショウ」は「意志・勧誘」の専用形に移行していく。

その結果、推量は「～でしょう」、意志・勧誘は「～マショウ」という分化が成立するわけであるが、最後まで推量の「～マショウ」が活躍したのは、⑤に示す天気予報である。昭和30年代の半ばまで「晴れマショウ」「降りマショウ」にこだわっていたが、これを聞いた子供たちは「サア

サア、皆さん晴れましょう」などと茶化したものだった。当時としては、推量の「～マショウ」は、すでに耳馴れない言い方であり、「～マショウ」はもっぱら意志勧誘の場合にのみ使われていたからである。

①「爰（ここ）を身抜（みぬけ）をさせもふす、手段（てだて）もまたありませうはネ」
(「梅児誉美」初編-巻二・1832-天保3)

辨天「知（し）らざあ言（い）つて聞（き）かせやせう、濱（はま）の真砂（まさご）と五右衛門（ごゑもん）が歌に残せし…」
(「青砥稿花彩畫」三幕・1862-文久2)

②「絵岸は何方（どつち）い当りいすネ」「てうど西にあたりますだらふ」
(「梅児誉美」・後編-巻六)

「さぞ美味（おいしい）お菓子が出来ますだらう」
(「究理話」1872-明治5)

③「飼馬町（かいばてう）か中橋あたりからも往（ゆく）でせう」
(「春色恋廻染分解」1860-萬延1)

④推量：さぞ寒いでせう。 さ一。 はいりたまへ。
(「尋常小学読本-国定一期」七・1903-明治36)

タロー ハ キット カシコイ ヒト ニ ナリマセウ。
(同上・二)

意志：オシリ ニ、シロイ トコロ ガ アッテ、ソコ ガ ヒカル ノデス。

トッテ ミセテアゲマセウ。
(同上・三)

勧誘：タケノコ ト セイクラベ ヲ シテミマセウ。
(同上・三)

⑤あすの晩は一時雨が降りましょう。

あすの晩はくもりで一時晴れましょう。

(NHKアナウンス部・昭和33年度「アナウンサー養成テキスト-基礎実習篇」)

5.3. 受身・可能・尊敬表現の分化

現在の標準語法では、「～レル・～ラレル」は、ほぼ「受身」の表現の専用形として用いられ、「可能」は可能動詞や「～ことができる」の形で表わされるのが普通である。また、「尊敬」の表現も「～レル・～ラレル」よりは、敬語動詞や「お～になる」などの形で表現されることが多い。しかし、江戸語では①の「(読ま) レル」、②の「(居) ラレル」のように「～レル・～ラレル」による「可能」や「尊敬」の表現が普通に用いられていた。このうち「～レル・～ラレル」による「尊敬」の表現は、すでに江戸語ではかなり早くから衰退期に入っており¹⁰、「可能」の方も江戸語では可能動詞が好んで用いられたうえ、19世紀初頭の文化文政期には「～ことができる」の形が成立し¹¹、次第に可能専用形に移行していった。

こうして「受身・可能・尊敬」を広く受け持っていた、多能型の「～レル・～ラレル」の役割がほぼ「受身」に限られ、「可能」「尊敬」の表現もそれぞれ単能型の専用の形に分かれていったわけである。

①此文（このふみ）を見な、冬の日にやア読まれねへ、三丈あまり有らア、

(「南極駅路雀」1789-天明9)

②おふくろの弟とやらが、谷中辺にゐられまして、

(「花街鑑」1826-文政9)

なお、大正末に東京の山の手言葉で使われはじめたとみられる¹²、いわゆる「ラ抜きことば」も、単能化の動きの一つとみることができよう。

5.4. 仮定条件法と既定条件法の分化

江戸語では、活用語のいわゆる仮定形に接続助詞の「～バ」のついた形は、仮定条件だけでなく、既定条件を表す用法も持っていた。①の「(見れ) バ」「(思え) バ」などがその例である。いずれも「見ると～」「思うと～」に当たる既定条件を表すものである。湯沢幸吉郎は、「江戸言葉の研究」の中で会話文について「思えバ(思やア)／居れバ／聞きますれバ／承りますれバ／聞けバ」の例をあげ、地の文については「言いつけれバ／引きあけれバ」の例をあげて、つぎのように述べている。

右の言い方は、地の文には珍しくないが、談話では「聞けば」「思えば」がしばしば現れるぐらいのもので、あまり用いなかつたようである。 (P613-4)

したがって、この語形は、すでに江戸語において衰退に向かっていたものとみられる。

「仮定形十バ」のこのような既定条件を表す表現は明治以降は次第に廃れ、②の「聞けば」「思えば」あるいは「顧みれバ～」「三人寄れバ～」といった慣用的用法に限られ、普通の会話にはほとんど見られなくなった。こうして活用語に「～バ」のついた形は、現在のように、おもに仮定条件に用いられる単能的なものとなっていった。

①「イヤそのことはともかくも、此家(このや)を見(み)れば、女主(おんなあるじ)の住居(すまゐ)の様子(やうす)、」 (「春色梅児誉美」卷十・1832-天保3)

「わたくしの乳でそだてぬから、猶(なほ)病身になりますると、おもへば不便(ふびん)がいやまして、(略) つよくもしからず、(略) 些(ちと)づゝ丈夫に育つやうだとおもへば、且那は又(略) 小言(こごと)をおつしやる…」

(「假名文章娘節用」三編・中・1831・天保2)

②「それに聞けば課長さんの所へも常不斷(じやうふだん)御機嫌伺ひにお出でなさるといふ事(こつ)だから、」 (二葉亭四迷「浮雲」・1887-明治20)

思えば去年船出して／お国が見えずになった時／玄海灘で手を握り／名を名乗ったが始めにて (真下飛泉「戦友」・1905-明治38)

各地から人々が集まってきてかたちづくられた、植民地言語ともいべき江戸語において、複雑な表現内容をもつ多能型の語形が、単純な内容の専用的な形に次第に分化して、明治以降の単能型の表現につながっていく様子を述べてきたが、考えてみれば、標準語法の形成過程で当然おこるべき変化である。日本語の場合、それが江戸の都市形成と、維新期以降の東京への人口集中のプロセスで、まず江戸語において多能型の表現が崩れ、単能型への分化が始まつて東京語で促進され、のちの標準語に引き継がれていったと見ていいように思う。

6. 微差の消滅

古代日本語においては、「キ」は直接経験を表し、「ケリ」は間接経験を表すとか、「伝聞・推定のナリ」と「断定のナリ」といった、微妙で細やかな差異が保たれていたことは、よく知られている。江戸ことばをベースにして東京語がかたちづくられ、それを土台にして現在の標準語が形成されてきた過程において、この種の微妙な小さな差異が、どのように変質してきたかを、つぎに考えてみることにする。

6.1. 格助詞「ノ」と「ガ」の尊卑分担

中世までの日本語では、格助詞の「ノ」と「ガ」では、「ノ」の方が敬意をこめて用いられるとする、いわゆる「尊卑分担」があった。池上秋彦は、①②に示す例をあげ、江戸語においても尊卑の別が認められるとして、つぎのように述べている。

格助詞の「が」と「の」であるが、此の尊卑の分担に就いて小田切氏は、江戸時代の前期・後期を通じて此の区別（尊称には「の」を用い、卑称には「が」を用いる）は厳密に守られていたと言っておられる¹²。而して、江戸小咄に徴しても同じ事が言えるようである。

①〈尊〉 おぢさんの所（聞上手） だんなのではない（聞上手）

御亭主様の御達者（聞上手）

②〈卑〉 おれが～（譚叢） わしがからだが（聞上手・二編）

身が女房（獨樂新話） （池上秋彦「国語史から見た近代語」 P86）

しかし、江戸ことばにおいては、特に話しことばでは、所有格の「ガ」そのものが、ほとんど使われなくなってしまっているので、「尊卑分担」については、その名残りが見られるといったあたりが妥当なところではなかろうか。

6.2. 「未然形十バ」と「已然形十バ」

江戸ことばでは、会話文においても、①の「降ら-バ」「あら-バ」のように、「未然形十バ」の形で仮定条件を表す言い方が、ときに見られる。また、明らかに既定条件を表している、②の「おりましたれ-ば」「見ますれ-ば」のような「已然形十バ」の形も認められる。いずれも、「仮定法の已然形移行（仮定形の成立）」よりも前の、中世的な語法の残照といえよう。

①「あいあすも、もし降（ふ）らば、ぶんながらしの、久しうりで、みつぢろうもしれやせん」
(「遊子方言」発端・1770-明和7)

「コウ姉さんいゝ酒があらばちつと斗出してくんna」

(「東海道中膝栗毛」三編・上・1802-享和2)

②「お帰りまでまでと男衆かいひやしたから待っておりましたればやうやう五時分になつて
帰つてらしつてネ…」
(「通志選」1781・天明1)

「仰（おほせ）の通り旧冬（きうとう）から見ますれば、殊の外おあつうござります」

(「八笑人」三編・上・1820-文政3)

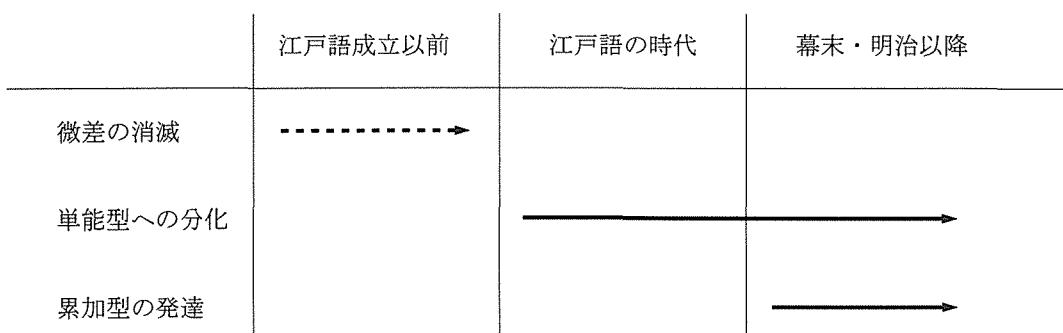
以上述べたほか、さきに4.3.で述べた「不可能」の表現の「～コトガナラナイ（～コトガナリマセン）」は、状況可能の場合にかぎられるようなので、あるいは江戸ことばには状況可能を表すものと能力可能をになうものとで、語形のうえの区別があったのではないかとも考えられるが、このあたりのことはまだ明らかにされていない。

いずれにしても、上方をはじめ、さまざまな地域から人々が集まって形成されてきた江戸ことばでは、それまでの日本語に見られた、種々の微妙な差異は、すでに失われつつあったといってよいようである。

しかし、幕末の江戸の町人男女の間で「～デス」や「～デアリマス」が使われはじめ¹³、これが「～デス／～ダ」「～デアリマス／～デゴザイマス」といった、新しい対立をもたらしたり、あるいはまた、江戸語では、稀だった格助詞の「～ニ」や接続助詞の「～ノデ」が、明治になって急に使われるようになって¹⁴、「～ニ／～ヘ」「～ノデ／～カラ」などの並立が生まれてきたことは、新たな「微差」の誕生ともいえよう。「～デアリマス」などは、すでに衰退に向かってしまったが、「～ニ／～ヘ」や「～ノデ／～カラ」などが、どこまでその「微差」を保ちうるかは興味深い問題である。

7. おわりに

これまで（I）においては、方言の語法の特徴と標準語のそれとを比べて、両者の間には、「団塊型／累加型」「多能型／単能型」「微差保有型／微差消滅型」といった対応が認められることを指摘した。そして（II）では、標準語に見られる、これらの語法上の性格が、江戸語から明治以降の東京語へ、さらに現在の標準日本語につながるプロセスで、どのように形成されてきたかを考察したが、ここでとりあげた標準語法の性格がかたちづくられてきた様相を図示すると、ほぼ、つぎの図のようなことになる。



注

- 1 朝日新聞（1997.9-29・朝刊）「野村語録」
- 2 井上史雄「新しい日本語」明治書院（1985）／荻野綱男・井上史雄・田原広史「周辺地域から東京中心部への新方言の流入について」国語学・143（1985）
- 3 柴田武「日本の方言」岩波書店（1958）

- 4 国立国語研究所「方言文法資料図集（3）」表179／表180：「着ることができる／着ることができない」（能力可能と状況可能の総合図）（1983）
- 5 中村通夫「東京語の性格」川田書房（1948）
- 6 松村明「江戸語東京語の研究」東京堂（1957）／小島俊夫「後期江戸ことばの敬語体系」笠間書院（1974）／田中章夫「（行き）マセンデシタから（行か）ナカッタデスヘ」言語学林・三省堂（1996）
- 7 渋谷勝己「日本語可能表現の諸相と発展」大阪大学文学部紀要33-1（1993）／齋岡昭夫「江戸語東京語における可能表現の変遷について」言語と文芸・54（1967）
- 8 辻村敏樹「敬語の史的研究」東京堂（1968）
- 9 中村通夫「東京語の性格」川田書房（1948）
- 10 山田正紀「江戸言葉の研究」武蔵野書院（1936）／辻村敏樹「敬語の史的研究」東京堂（1968）／田中章夫「東京語—その成立と展開」明治書院（1983）
- 11 坂梨隆三「江戸後期の可能動詞」国語と国文学・72-1（1995）／原口裕「可能表現スルコトガデキルの定着」国語と国文学・62-5（1985）
- 12 小田切良知「明和期江戸語について」国語と国文学・20-11（1943）
- 13 松村明「明治初年の洋学会話書における助動詞『です』とその用法」近代語研究・8（1990）／吉川泰雄「近代語誌」角川書店（1977）／田中章夫「デアル・デアリマス・デス—近代教科書の会話文体」語源探求・3（1991）
- 14 齋岡昭夫「近代口語文章における「へ」と「に」の地域差」中田祝夫博士功績記念国語学論集（1979）／田中章夫「標準語」誠文堂新光社（1991）／原口裕「ノデの定着」静岡女子大学研究紀要・4（1970）／田中章夫「因果関係を示す接続の『デ』『ノデ』の位相」近代語研究・9（1993）

資料・文献略号一覧

- 1 談-1～談-8：国立国語研究所資料集10「方言談話資料1～8」1978年～1985年
 - 談-1・山形：①収録地点：西村郡河北町谷地 ②収録年月：1975年12月
③担当者：矢作春樹
 - 長野：①上伊那郡中川村葛島 ②1975年11月 ③馬瀬良雄
 - 談-2・長崎：①西彼杵郡琴海町尾戸郷小口 ②1976年4月 ③愛宕八郎康隆
 - 談-3・青森：①青森市牛館 ②1978年9月 ③松本宙・佐々木隆次
愛知：①北設楽郡富山村中の甲 ②1975年9月 ③山口幸洋
 - 談-5・静岡：①静岡市南字中村 ②1975年10月 ③日野資純
宮城：①亘理郡亘理町荒浜 ②1979年12月 ③加藤正信
 - 談-6・愛媛：①越智郡伯方町木浦 ②1975年9月 ③杉山正世
宮崎：①宮崎郡清武町今泉 ②1975年11月 ③日高貢一郎
鳥取：①八頭郡郡家町奥谷・上津黒 ②1976年2月
③佐藤亮一・真田信治・白沢宏枝
 - 談-7・千葉：①館山市相浜 ②1976年12月 ③加藤信昭
 - 談-8・群馬：①利根郡利根村追貝 ②1976年8月 ③上野勇・杉村孝夫
高知：①南国市岡豊町常通寺島・滝本 ②1976年10月 ③土居重俊
- 2 記：国立国語研究所報告・16「日本方言の記述的研究」1959年11月
 - 記・鹿児島：①調査地点：薩摩郡高城村 ②担当者：上村孝二
山形：①北村山郡東根町 ②斎藤義七郎

愛知：①西春日井郡北里村 ②野村正良
宮崎：①西臼杵郡日の影町 ②野元菊雄
和歌山：①東牟婁郡高池町（新・古座川町） ②村内英一
3 宮島：宮島達夫「語彙論研究」1994年12月

付 記

この論文は、1997年10月18日に山形大学で開催された国語学会秋季大会の公開講演会における講演の内容に手を加えてまとめたものである。

（投稿受理日：1998年4月13日）

田中 章夫（たなか あきお）
学習院大学文学部
171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

On the grammatical characteristics of Standard Japanese

TANAKA Akio

Gakushuin University

Keywords

standard language, dialect, language of Edo, language of Tokyo, grammar

Abstract

If one compares the grammars of dialects with that of the so-called standard language, it is possible to recognize the following correspondences between them: expansive / accumulative; multi-functional/mono-functional; distinction-preserving/distinction-losing. The existence of such differences between dialect grammars and that of the standard language have been one of the reasons for dialects being valued as having character, or as being capable of expressing subtle distinctions, while on the other hand the standard language is thought of as being overly logical and dry.

However, the grammatical characteristics found in the standard language are ones that a standard language — as the language used for communication above and beyond dialectal distinctions — should indeed furnish.

In this paper, I will investigate how the grammatical characteristics of the standard language came to be formed, looking at them from the point of view of the process through which the present day standard developed from its base in the language of Edo and of Tokyo.